

第38回（令和4年度）
石川町少年の主張大会
—今、私たちが伝えたいこと！—
作品集



主催 石川町青少年健全育成推進協議会

後援 福島民報社/福島民友新聞社/町民ニュース社/夕刊いしかわ新聞社

《第38回石川町少年の主張大会作品 もくじ》

・『夢をかなえるために』					
石川小学校	6年	曾根	秀祐		1
・『私たちの未来』					
石川小学校	6年	富岡	百合花		3
・『みんなが幸せになるために』					
石川小学校	6年	高橋	美羽		5
・『思いやりの心が世界を平和に』					
野木沢小学校	6年	水野	陽菜		7
・『言葉がつくる世界』					
石川中学校	3年	相楽	悠智		9
・『私が作る希望のかけら』					
石川中学校	3年	佐川	樹里		11
・『命の尊さを考えよう』					
石川義塾中学校	2年	根本	芽依		13
・『人工妊娠中絶について』					
学校法人石川高等学校	2年	渡邊	咲来		15
・『情報と生活』					
福島県立石川高等学校	2年	小林	果楓		17

《少年の主張大会の趣旨》

少子高齢化、国際化、情報化が急速に進み、環境が目まぐるしく変化する現代社会において、次世代を担う子どもたちには、心身ともに健康で他者を思いやる心を持ち、社会的に自立していける、健やかな成長が求められています。

そのためには、広い視野と柔軟な発想や創造性などと共に、物事を論理的に考える力や、自らの主張を正しく伝えて理解してもらう力などを身に付けることが大切です。

少年の主張大会は、青少年にとってこれらの契機となることを期待するとともに、青少年の健全育成に対する町民の理解と関心を深めていただくことを目的として実施しました。

《講 評》 石川町社会教育指導員 三森 孝則

『夢をかなえるために』

石川小学校 6年 ^{そね}曾根 ^{しゅうすけ}秀祐

近年、教員を目指す人は大きく減っています。詳しく調べてみると、教員採用試験の受験者数は、昭和 54 年をピークに約 10 万人も減っていることが分かりました。学校の先生は、勉強を教えるだけではなく、子供たちと真剣に向き合わなければいけない大変な仕事です。公立小中学校の教師 924 人に聞いたアンケートでは、8 割を超える人が「仕事に魅力を感じる。やりがいを感じる」と回答しています。しかし、「教師を辞めたいと思ったことがある」と答えた人も 6 割を超えたそうです。

先生全体の数が減ってしまえば、一人一人の負担が大きくなります。その結果として、本当に学校や子供が好きで意欲を持って夢を叶えた先生が苦勞を感じてやめてしまうとしたら、それはとても残念なことです。そして、さらに教員数が減ってしまうという悪循環にもつながります。

また、在学中に熱意のある先生に出会えることは、子供たちにとっても幸せなことです。そのような貴重な人材を失うことは、教育を受ける側にとって大変なマイナスであると思うのです。

ぼくの夢は、学校の先生になることです。先生になるために必要なことを調べてみると、短期大学の教育科や大学の教職課程を卒業したり、いろいろな試験を受けたりしなければならないことが分かりました。ぼくは、地元が好きで、家族と過ごす時間を大切にしたいと願っています。できれば家族と一緒に生活しながら大学に通うことを望んでいます。しかし現在、実家から通える範囲には、条件を満たす大学は無く、ぼくの思いを叶えることはとても難しいと分かりました。でも、首都圏に住んでいるところは、たくさんの選択肢があって、希望する大学に自宅で生活しながら進学することができました。ぼくも同じ大学にあこがれた時期がありましたが、個人の努力や経済力以前の面で大きな地域差があり、ぼくにはとてもハードルが高いと感じました。このように居住地によって進路の選びやすさが変わってしまうこともあります。

ぼくと同じような状況にあり、夢をあきらめてしまう人もいるかもしれません。そのようなことを防ぐには、希望する人が学びたい時に、無理なく学べる社会の仕組みが必要だと思います。そして、誰にでも学ぶ機会が得られるようにしなければなりま

せん。そのためには、首都圏と地方での格差がなく、誰でも学ぶことができる環境が必要です。

さらに、質の高い教育を行うためには、当然教える側の人の人間力も問われます。ぼくは今、尊敬できる先生に出会い、学校の先生を本気で志すようになりました。将来は母校で先生として働けるようになりたいです。ぼくがもし先生になることができれば、その先生のように一人一人のことを理解して向き合いながら、時には楽しく、時には厳しく色々な事を教えていきたいと思います。そして、学校を楽しいと思ってもらい、地元石川町をもっと好きになってもらいたいです。そのためにも、自分で努力をするのはもちろんのこと、自分に合った環境を選んで自分を高めていき、夢を叶える準備をしたいと思います。

(講評)

秀祐君は教員の仕事の大変さをよく理解しているなと思いました。

尊敬できる先生に出会えたことは秀祐君の将来に大きな影響を受けたことでしょう。教員になることはそう簡単なことではありませんが、秀祐君のようなしっかりした考えを持っていれば大丈夫。同時にもっと視野を広げるためにも勉学に励んで夢をかなえてください。将来、秀祐君が子供たちをよく理解できる素晴らしい教員として活躍できることを期待しています。

『私たちの未来』

石川小学校 6年 ^{とみおか}富岡 ^{ゆりか}百合花

私たちが大人になった時に、私は、世界中の誰もが、安心・安全・笑顔で暮らせるようになってほしいです。そして、その幸せが、ずっとずっとずうっと続いていてほしいです。そのためには、まず、世界中の誰もが、世界で起きている出来事を他人事にせず、「自分たちにもできることはないだろうか。」と真剣に考えることが大切だと思います。

今、世界はさまざまな問題を抱えています。その中でも、私は、ロシアとウクライナの戦争に関心があります。私は、なぜ、戦争をしなければいけないのか。なぜ、罪の無い人々が殺されなければいけないのか。などの「なぜ」をたくさん感じています。戦争があると、いつ攻撃されるか分からず、夜も安心して眠ることができません。大切な家族・友人・恋人などを失ってしまうかもしれません。このようなことが起こる戦争があると、世界中の誰もが幸せになることなんて、絶対にありません。なぜなら、テレビで見ているだけの私でも、戦争を経験していない私でさえ、心が苦しくなるからです。それなのに、実際に戦争をしている人々、現地で取材をしている人々が幸せなはずがないからです。私は、「もし、日本も戦争にまきこまれてしまったら。」と考えると、とても不安になります。今まで、「あたり前だった日常」があたり前ではなくなるのです。私には想像できません。想像したくもありません。このような戦争をなくすためには、「暴力で解決をしない。」ということも、とても大切です。暴力でおさえつけていても、良いことは、何もありません。これは、今日から私も実践することができます。イラッとして、すぐに手をあげるのではなく、怒りのピークといわれている、6秒間を心の中でゆっくり数えたり、その場をはなれたりすることはできます。それに、「他の人のことを思いやる。」ということも、大切です。自分がやられていやなことは、他の人にやらないということは、小学生でも知っています。思いやりの気持ちを持ては、世界は、きっと、平和になります。

私は、明るい未来を望んでいます。戦争がなく、差別もなく、平和で生きやすい、大好きな人と過ごせて幸せ、そういう未来を望んでいます。だから、日常の中にある、私たちにできることを実践し、少しずつ、少しずつ、明るい未来へと変えていきたい

です。すぐには、変わらないと思います。しかし、「どうせ無理だから。」とやらないのではなく、私たちの次の世代、その次の世代、その次と続けていけば、何かは、変わると思います。私たちの未来は、明るい未来になることを願っています。私たちの、安心・安全・笑顔の未来を作っていきたいです。

(講評)

百合花さんは、明るい未来をつくるための発表をしてくれました。

現在、自分勝手な考えで戦争を引き起こし、世界中を混乱させている国もあり、問題解決には予想以上に難しいのも現実です。そんな中で「他人のことを思いやる」という心を大切にしている百合花さんは素晴らしいと感じました。百合花さんを含めた若い人たちが関心をもって考え、行動していくことが大事だと思います。そしてその心を、次の世代へと受け継がれ少しずつでも良い世界に変わっていくことを願っています。

『みんなが幸せになるために』

石川小学校 6年 ^{たかはし}高橋 ^{みう}美羽

みなさんは、「差別」や「偏見」という言葉を聞いて、どう感じますか。多くの人は、「差別をしてはいけない。」「見た目や思い込みで決めつけてはいけない。」と考えます。けれど、本当に世の中は差別や偏見をなくそうとしているのでしょうか。海外では、黒人というだけで偏見をもたれ、差別をされるということがあるそうです。日本でも、新型コロナウイルスに感染したことで差別を受けるということもありました。差別や偏見はいけないことだと多くの人が思っているにもかかわらず、このように、世界中で差別や偏見による悲しい出来事が起こっているのです。

実は、私も他の人に偏見をもって近づけなかったことがあります。その人は、車いすに乗っていて、道路の段差で動けずにいました。その人は、明らかに困っていました。でも、周りの人は誰も助けようとはしていませんでした。それに気づいた母が、その人を助けに行きました。その後母に、

「なぜ助けにいったの。」

と聞いてみました。すると、母は、

「もし美羽が困っていて、誰も助けてくれなかったら困るでしょう。」

と言いました。そんなことがあってから、「もし私があの人だったら。」と考え、困っている人がいたら進んで助けるようになりました。

でも、世の中の差別や偏見を完全になくすことは、今の世界ではとても難しいことだと思います。なぜなら、人はいろいろな考えを持っているからです。その中には、その人にとっては当たり前だと思っていることもあります。例えば、「女の人が料理をするのは当たり前。」というような考え方です。しかし、受け取る人によっては、とてもつらいと感じることもあります。そのような考えのちがいがもとでひどい時には体調をくずしたり、最悪の場合、死に追い詰められてしまうこともあります。

では、今ある状況を変えるには、どうしたらよいのでしょうか。私は、一人一人の意識を変えて、もっと相手の立場に立ち、相手を思って行動することで、世の中が少しずつ変わると 생각합니다。お互いに「違い」を受け入れ合って、みんなが気持ちよく過ごせるように思いやり、仲良くすること、それだけで十分だと思います。みんな違

ってみんないい。」私のおさない妹でも分かる言葉です。

人間には、生まれながらに持った人権というものがあります。それは、自分らしく幸せに生きるための権利です。誰もが幸せに安心して生きていける世の中にするために、私は、まずは、身近なところからできることを探していきたいです。それは、家族や友達を大切にすることです。みんなが幸せになるために、そんな気持ちを持った人がひとりでも多くなることを私は祈っています。

（講評）

「差別」「偏見」それはだれの心にももっているもので、私たちも考えさせられる問題です。美羽さんはこの問題に対して、どうしたらみんなが幸せになれるのかという内容で発表してくれました。お母さんの言動により、美羽さんの考えも変わっていったということで、素敵なお母さんだと思いました。

みんなが幸せになれるよう、身近なできることを探すという美羽さんの思いは、とても大事なことです。美羽さんのような方がたくさん増えてより良い世の中になってくれればいいですね。

『思いやりの心が世界を平和に』

野木沢小学校 6年 ^{みずの}水野 ^{はるな}陽菜

今、ロシアとウクライナの戦争が毎日のニュースで取り上げられています。ロシアの攻撃を受けて、ウクライナで、たくさんの人が亡くなっている様子が伝えられています。その中には、私と同じくらいの年齢の子どもも含まれています。私はそれを知るたびに、とても悲しい気持ちになります。

人や国は、なぜ戦わなければならないのか。争いはなぜ起こるのか。そして、争いをなくすためには何が必要で、自分には何かできることはないのだろうか。私は、争いのない平和な社会をつくるにはどうすればよいかを考えるために、新聞を切り取ってノートにスクラップをしたり、戦争を経験した祖母から話を聞いたりしました。

祖母が小学校5年生の時は、戦争中で食べ物が十分になく、そこら辺に生えている草を食べたり、虫を食べたりしながら、飢えをしのいでいたそうです。夜は爆発音が鳴り、恐怖と不安で眠れなかったそうです。私はスクラップした新聞記事と祖母の話を重ね合わせ、ウクライナの人たちも私の大好きなおばあちゃんと同じ気持ちで生活しているのではないだろうかと考えました。そして、ウクライナが平和な国に戻ってほしい、これ以上犠牲者が出ないでほしいと心の底から思いました。

私は戦争や争いをなくすためには、一人一人が相手の心を理解しようとする気持ちをもって人と接することが大切だと思います。人はそれぞれ大切にしていることや考え方が違います。でも、相手の気持ちや立場を考えずにお互いに自分の思いだけをぶつけてしまうと、時にけんかになってしまうこともあります。自分の考えを一方的に押しつけたり、力で言いなりにさせたりしても解決しません。きちんと仲直りできればよいのですが、上手くお互いに思いを伝えることができないと自分も相手もお互いに嫌な気持ちが残ったままになってしまいます。相手としっかりと話し合い、相手のことを理解しようとするのが大切なのです。

戦争や争いをなくすためには、一人一人が相手のことを理解しようとする心をもてばいい。そして、それは私たち小学生にもできることです。私達も友達と意見が違ってけんかになってしまうことがあります。そんな時、まずは相手の気持ちを想像し、受け入れようとする気持ちをもって話し合えば、お互いの心が分かり、心が通じ合い、

もっと仲良くなれると思います。

一人一人ができることは小さなことかもしれませんが、相手の気持ちを理解し、受け入れようとする気持ち、そして、相手を大切な存在として関わろうとする「思いやりの心」が、戦争のない平和な世界につながると 생각합니다。私も、毎日の生活の中で、「思いやりの心」をもって、人と接していきます。

（講評）

ロシアとウクライナの記事をスクラップしたり、おばあちゃんの戦争体験などを聞きながら詳しく勉強していますね。それを踏まえて「世界の平和」について発表してくれました。ロシアとウクライナの戦争だけでなく、あまり報道されてはいませんが、現在、世界各地で争いが起きています。国際秩序を守らない国、民族問題、宗教問題、資源問題等、国どうしを理解し合うのは予想以上に難しいのも現実です。

陽菜さんのように、相手のことを理解する心「思いやりの心」を大切にすることはとても大切なことです。陽菜さんのような考えをもった人がたくさん増えて、少しずつでも世界が平和になっていけばいいですね。

『言葉がつくる世界』

石川中学校 3年 さがら ゆち
相楽 悠智

皆さんは普段、言葉を発するときに相手のことを考えて発言していますか。あなたが発した音の言葉、文字の言葉、それは相手を傷つけていませんか。

私は言葉とは意思を伝えたり、コミュニケーションをとったりするために使う便利なツールだと思います。相手との関係を築いたり、相手に影響を与えたりする、私たちにとって必要不可欠なものです。

しかし、言葉は使い方によって誤解を生み、相手を嫌な気持ちにさせてしまいます。例えば、「うるさい」や「黙れ」などと言われたらどう感じますか。また、冷たい態度で会話をされたらどう感じますか。さらに、SNSでは文字なので捉え方によっては、ひどい、冷たいと感じる人もいるでしょう。

最近、友達の書き込みを見ました。誰でも簡単に書き込めるので友達がほぼ毎日のように書き込みをしています。SNSはコミュニケーションが取れる便利で楽しい機能だと思います。しかし、一つだけ、不快に思う点があるのです。それは、ありのままの気持ちをなんでも、気軽に書き込みをしていることです。

「〇〇ちゃんが嫌い」

「学校がめんどくさい」

嫌いだと言われたその人は……。前向きに頑張ろうとしている人は……。どう感じるのでしょうか。それを目にする人の気持ちを考えずにそのときの気分で発信する言葉はどれも不快に感じます。

皆さんも誹謗中傷についてのニュースを目にしたことがあると思います。ある芸能人への集中的な誹謗中傷や、いじめ。その書き込みによって自ら命を絶ってしまう悲しいできごとが世界中で起こっています。

誰もが書き込めるからこそ、誰もが加害者になる可能性があるのです。

では、改めて言葉の使い方を考えなおしてみましょう。面と向かって会話をするときには、どんなことに気を付ければ良いのでしょうか。直接話すときにはお互いの表情が見えます。自分の話したいことを誤解されてしまうことは少ないと思います。言い方や伝え方に注意して会話すれば、相手を不快な気持ちにさせないと思います。

では、SNS への書き込みではどんなことに気を付ければよいでしょうか。一番大切なのは、発信する前にもう一度確認することです。この一言で多くの人を不快にさせることはないか、誰かを傷つけないか、再確認してください。それが判断できない発信はすべきではないと思います。

話す言葉、書く言葉、どちらも同じ言葉です。人を喜ばせることができ、人を悲しませることもできる難しいツールです。使い方次第で相手の運命を大きく左右するかもしれません。

言葉は、受け取る相手があります。相手の姿や表情をよく見たり、想像したりできれば、あなたが発する言葉には優しさが生まれます。

優しい言葉は、「優しい世界」をつくり、差別や偏見のない世界に繋がっていくのではないのでしょうか。そんな世界をみんなでつくっていきましょう。

そして忘れないでください。あなたの言葉は必ず誰かが受け取っています。

(講評)

悠智さんは言葉の発し方による相手への影響について発表してくれました。

言葉の発し方によって相手を傷つけたり、喜ばせたり、とても分かりやすい内容で、私たちも注意しなければならないなと感じさせられました。

日本語は外国語と違って、一つの言葉でも数種類の意味を持つことがあり、相手に誤解を持たれることが多々あります。そのことに注意しながら、悠智さんが大事にしている優しい言葉で「優しい世界」をつくっていきましょう

『私がつくる希望のかげら』

石川中学校 3年 さがわ じゅり
佐川 樹里

「ヘアドネーションという言葉 皆さんは知っていますか。」

ヘアドネーションとは、病気で髪が抜けてしまった子供に無償で髪を贈ることです。髪には条件があり、31センチ以上、引っ張っても切れないなどが挙げられます。

ヘアドネーションをした髪で作ったウィッグを、現在、100人以上の子供が待っているそうです。皆さんが帽子をかぶって生活する子を見かけたことがあるとしたなら、その子はウィッグを待つ、100人の中の一人かもしれません。

私がヘアドネーションをしようと思ったきっかけは、ある小学生の男の子をテレビで見たことでした。難病で髪の毛が抜けてしまった妹のため、髪を伸ばし続ける姿、

「病気の妹を笑顔にしたい。」

その一言に私は気持ちが揺さぶられました。

「私もやりたい。」

その話を母にすると、

「いいんじゃない！」

と前向きな言葉をかけてくれました。私は決心がつけました。周りの人からの

「あなたの髪で誰かが笑顔になるっていいことだね。」

その言葉が、私の考えは間違っていないのだと力をくれました。

いざ始めたとき、私はどれくらいの方がヘアドネーションをしているのか疑問に思いました。いつも行っている美容院で聞いてみると、

「うちの美容院は10人ぐらだよ。」

と驚きの回答が返ってきました。初めから少ないことは知っていましたが、こんなに少ないとは思いませんでした。さらにインターネットで調べてみると、あるアンケートでは、病気で髪が抜けてしまう子がいることを80パーセントの人は知っているのに、その中でヘアドネーションをしたいという人は20パーセントにも満たないという結果でした。髪が抜けている人は何万人もいるなか、実際にやりたい人はわずかしかない。この現状を変えたい。そう思いました。私ができることはほとんどないかもしれない。だからこそ、今できるヘアドネーションをやる。少しでも行動を起こす

一人にならなくてはと考えました。

「みんなやらないからやらない」ではなく、「みんながやらないからこそまずは自分がやる」という気持ちが大切だと思います。

今は、まだまだ少ないヘアドネーション。今後たくさんの方が協力する未来が訪れてほしいです。

私も何度も思ったことがあります。ドライヤーをかけるのが大変。髪を洗うのが疲れる。早く髪を切ってしまいたい。でも私の髪がつらい思いをしている子供たちの笑顔をつくる。そう考えるとマイナスな気持ちは飛んでいきます。病気の子にできることは限られているかもしれませんが、ですが、行動を起こすことが何より大切だと思います。そして小さな行動でも、たくさん集まればたくさんの笑顔を作ることができるのです。辛い思いをしている人の力になりたい。まず、私は私にできるヘアドネーションをする。この希望の欠片を届けるまであと一歩。この夢を叶えるまで、私は髪を伸ばします。

(講評)

「ヘアドネーション」に挑戦している樹里さんは大変すばらしいと思いました。樹里さんの髪の毛で作られた「ウィッグ」を贈られた方は大変喜ばれるでしょう。

「ヘアドネーション」に限らず、小さなことでもいい、人の役に立つ事はいっぱいあります。樹里さんの今の優しい心を持ち続けて、人の役に立つ素敵な大人になっていくことと信じています。頑張ってください。

『命の尊さを考えよう』

石川義塾中学校 2年 ^{ねもと}根本 ^{めい}芽依

16052000。みなさんはこれが何の数字か分かりますか。これは2021年の全国犬猫飼育実態調査で分かった、家庭で飼われている犬と猫の数です。これはあくまでも、届け出があったペットの数なので、実際にはもっといるはずです。私たちの生活の中では、これだけたくさんの犬や猫が家族の一員として生活しているのです。

では、72433、これは何の数でしょうか。これは、動物愛護団体によって昨年度内に引き取られた、保護犬や保護猫の数です。みなさんはこの数を聞いてどう感じましたか。私は、想像よりもはるかに多く、驚きました。これだけ多くの犬や猫が人間の無責任な行動で飼い主を失い、保護されています。

それでは皆さん、23764、この数はどうでしょう。そうです、同じ1年間で殺処分された犬や猫の数です。保護された犬と猫のうち、何と3分の1は、自治体によって処分され命を失っているということなのです。決して少ない数ではありません。

ここ2年の間、コロナ禍による多くの制限によって、私たちには大きなストレスを受け続けています。そのような中で、動物からの癒やしを求め、動物を通じた家族とのコミュニケーションを深めるために、ペットを飼い始める人が増えています。しかしその一方で、これだけ多くの動物が飼い主を失い、もしくは殺されているのです。

以前、私の叔母が、東京の渋谷でペットの自動販売機を見つけたそうです。まるでジュースを買うように、気軽に犬を買うことができるというのです。私はこの話を聞いて、一匹の動物の命をこんなに簡単に扱っていいのかと心配になりました。また、何の心構えもなく買われていった動物たちは一体どうなったのかと不安になりました。

私は動物が大好きです。幼い頃からたくさんの動物と触れ合ってきました。現在は、6歳の犬「ボルト」と、もうすぐ2歳になる猫の「ラン」と一緒に暮らしています。2匹とも私たちの大切な家族の一員です。

ボルトはペットショップから迎えましたが、ランはいわゆる「保護猫」です。空き地にひとりぼっちでいたところを友人が保護し、私が引き取りを希望して迎えた猫です。動物好きの私はランを一目見て飼いたいと思い、すぐに家族に飼ってもいいかと頼みました。しかし、家族は簡単に賛成してはくれませんでした。なぜなら、私が目

先の可愛さだけで飼いたいと言っているのではないかと思ったからです。ペットを飼うことは、最後まで命に責任を持つことです。一匹の動物の命を預かるのだから、そこまで考えなくてはいけないのです。私は家族と一緒にじっくり考え、ランが生涯を終えるまで責任を持つことを約束して、家族の一員として迎えることを決めたのです。

みなさん、ペットショップに売られているたくさんの可愛い犬に心をひかれたことはありませんか。そして、衝動的に「飼いたい」と思ったことはありませんか。その動物が一生を終えるまでしっかりと面倒を見る責任を持たなければ、自分もペットも幸せになることは出来ないのです。

私は以前から獣医になりたいという夢を持っています。これは、大好きな動物を病気やけがの苦しみから助けてあげたいという思いから持った夢です。ですが動物の命の尊さを学び、動物愛護についてもっと深く考える機会を持った今、今後は動物医療だけでなく、様々な方法で動物たちの命を救う方法を考え、できることから実践していきたいと考えています。

動物は単なる癒やしの道具ではありません。私たちと同じ、尊い命を持っているのです。そんな当たり前のことをもう一度考えてみませんか。

（講評）

家庭で飼われている犬と猫の数、保護犬や保護猫の数、殺処分された犬や猫の数よく調べましたね。私もちょっと驚きました。最近、ペットショップで犬や猫に一目惚れして衝動買いした結果、短い期間で飼うのを放棄してしまうケースも少なくないと聞きます。芽依さんの言うとおり、動物の命を預かるからには最後まで責任を持つことが大事だと私も思います。

動物好きな芽依さんは将来、獣医になる夢を持っているようですね。これからも勉強に励んで夢がかなうよう頑張ってください。

『人工妊娠中絶について』

学校法人石川高等学校 2年 ^{わたなべ}渡邊 ^{さき}咲来

皆さんは「ロー対ウェイド」判決を知っていますか。この裁判は、人工妊娠中絶をめぐるアメリカ合衆国の大規模な裁判で、「人工中絶の禁止は女性の人権侵害であり合衆国憲法違反」とされたものです。この判決自体は1973年に妊娠中絶を原則禁止としたテキサス州の中絶禁止法を違憲としたものです。この判決により、アメリカでは州法で人工中絶を禁止することができませんでしたが、最近になってこの判決を覆す最高裁判決の草案がリークされ、話題になりました。私はニュースでこのことを知り、改めて人工中絶について考えました。

私は人工中絶について、基本的に反対です。なぜなら、たとえ望まない妊娠だったとしても、中絶は命を奪う行為だと考えるからです。日本では毎月約12000件の中絶があります。つまり、仕方ない事情があるとはいえそれだけの数の子どもが殺されているも同然なのです。また、中絶を行う母親の多くは20歳未満といわれています。その中でも特に、高校生が多いのが気になりました。どうしてこれほど高校生に望まない妊娠が多いのでしょうか。私はこのことについて、「妊娠に対して深く考えておらず、責任感がないから」が大きな理由だと考えました。若い世代には、人の命への考え方が甘く、軽い気持ちで中絶をする・させる人が多くいます。このように、人の命に関わる事への考え方が軽い原因は、性行為や妊娠に関する知識不足などだと考えます。私たちが知っている性についての情報は先輩、友達から聞くことや、インターネットで収集することが多いでしょう。しかし、それは全てが正しいとは限りません。誤っている情報や、意図的に操作された情報も多くあります。こうした情報源から中途半端に知識を得て、深く考えずに交際している男女が多いのではないのでしょうか。中学・高校の保健の授業で「受精」に関して触れることはあっても、「性行為も含めた男女交際のあり方」「正しい避妊」について教えることはあまりありません。私はこの教育方針も変えるべきだと考えます。「性教育＝性行為教育」だと思っている人が多いと思います。ですが、性教育というのは、体や心の変化についてはもちろん自分や相手のことを理解して尊重すること、性別にとらわれない自分らしさについてなど、人間社会で生活していくうえで必要な知恵や常識に関わるものです。中絶を繰り返すと、子ど

もを産めない体になってしまうこともあります。教育が性の知識について正しい情報を伝えることで、未来の母親・子ども両方の命を救えるようになるはずです。

「命」とはいつ始まるのでしょうか。私は、受精した瞬間だと考えます。確かに現行法では出産の瞬間が誕生とされていますが、それは正しくないと思います。なぜなら、母親のお腹の中にいるときに、赤ちゃんはすでに生命活動を開始しているからです。世の中には望まない妊娠も数多くあります。しかし、どんな事情があったとして、1人の人間の命を、人生が始まる前に奪って良いのでしょうか。高校生の母親では精神的・経済的な理由で子育てが難しく、中絶を選ばざるを得ないこともあるでしょう。養親に赤ちゃんを託す「特別養子縁組」制度などの選択肢もありますが、現状、要件の厳しさから中絶問題をカバーできるほどの制度ではありません。当然、養子縁組があるからといって軽々しく子どもを作るのも論外ですが、様々な場合に備えてこういった制度を拡充していけば、いざというときのセーフティネットになると考えます。

以上のように、私は人工妊娠中絶には反対です。中絶によって失われる命が一つでも減るように、若い世代に注意喚起と正しい教育が行われるようになればよいと思います。

（講評）

「ロー対ウェイド」判決とは、1970年にテキサス州の連邦裁判所で始まった人口妊娠中絶の是非を問う裁判で1973年に判決が下されました。判決は咲来さんの発表のとおりです。咲来さんの発表の中では「命」の大事さが非常に強く表れていました。

捨てなくてもいい「命」を作らないためにも「性」の細かな教育が非常に大切だと感じたと共に、「命」をととても大切にする咲来さんはとても素晴らしい方だと感じました。とても良い発表でした。

『情報と生活』

福島県立石川高等学校 2年 小林 果楓^{こばやし かえで}

私には、コロナワクチンを一度も打ったことがない親戚がいます。みなさんは、今、このことを聞いてどう思われますか？一部の方々の中には、「なぜ打たないんだ」と強く反対する人がいると思います。しかし、これにはちゃんとした理由があります。その親戚は、様々な薬品の成分に対して多くのアレルギーを持っています。もしそれらの成分を摂取した場合、重度のアナフィラキシーを発症します。そのため、親戚はコロナワクチンを打つことができないのです。

昨年の夏、私は近況報告のために親戚の家に電話をかけました。前回電話をした時と変わらず、何気ない日常生活のことと、慣れない高校生活の話に花を咲かせていた時、私はふと、「ワクチン接種も終わったし、もう少し経てば、また、遊びに行けるね。」と話した所、その人は少しためらうように「ごめんね。ワクチン打ってないから、まだまだ会えないかな。」と答えました。その時の私は「そうなんだ。」としか答えませんでした。心の内では、何で打ってないの？打つのが当たり前じゃないの、と思っていました。その後に母からその方のアレルギーについて説明され、ようやく理解することができました。

そこで私は、なぜワクチンを打つことが当たり前だと思ってしまったのか考えました。私自身、もう少し視野が広ければワクチンに対してアレルギーを持っている人がいると分かったはずですが、それにも関わらず、なぜ私はワクチン接種は当たり前と思っていたのかと考えた結果、ほとんどの原因はテレビやインターネット等のメディアの情報の影響ではないかという考えに至りました。もちろん、自分自身の視野の狭さも原因の一つだと思います。しかし、テレビのCMでは「ワクチンを打とう」等、ワクチン接種を促す言葉を頻繁に見かけます。さらに、旅行で飛行機に乗る際は、ワクチンを接種した記録用紙を見せなければならないほどです。これでは、身体的な理由でワクチンを打てない人は、旅行だけでなく、仕事での出張などにも影響が出るのではないかと思います。

なぜメディアはここまでワクチン接種を促すような情報を流すのでしょうか。調べてみると、日本はワクチンの確保に2.4兆円を使っていることが分かりました。そ

して、購入したワクチンの使用状況は、正確な数までは分かりませんでした。一回目と二回目のワクチン接種をしても余るくらいあるようです。現在、ファイザー製とモデルナ製のワクチンは、一回目と二回目の余りを三回目に使用中ですが、三、四回目の接種率が低いままだと、大量に余ってしまうそうです。

つまり、メディアはワクチンを余らせないために、ワクチン接種を促しているという見方ができるのではないかと考えられます。もちろん、コロナウイルスの感染防止は必要です。しかし、ワクチンの接種は個人の判断であり、自由であるはずです。理由があってワクチンを打てない場合には、消毒、マスク等の感染予防を徹底するなどの対策をとった上で打たない選択もあると思います。メディアは、様々な事情を抱えた人がいることを含めた上で言葉を選ぶ必要があると考えます。

そして、私たちもメディアだけを一方的に信じるのではなく、情報の根拠を自分で調べていくことが必要だと思います。メディアの、ある一つの意見だけを信じてしまうと、前の私のように「ワクチンを打って当たり前」という考えになってしまい、ワクチンを打てない人を傷つけてしまうかもしれません。世の中には、とても多くの情報があふれています。一人一人が、様々な角度から見た情報を知り、その信憑性や根拠を調べた上で、情報を活用すること。私は、それが、お互いに情報を役立てる一つの有効な手段だと考えます。

(講評)

果楓さんの発表した通り、何らかの理由でワクチンを接種できない人を擁護することはとても重要なことだと思います。私の知り合いにもワクチンを接種出来ない体質の方がいます。当然、感染予報対策はしっかりとって生活しています。

果楓さんの思うように、一つの情報だけでなく、色々な角度から情報を得てワクチンを接種出来ない人たちを偏見の目で見ることのないようにしたいものですね。

これは「相手に対しての思いやり」にもつながります。わかりやすくとても良い発表でした。

第 3 8 回（令和 4 年度）石川町少年の主張大会作品集

石川町青少年健全育成推進協議会

〒963-7852 石川町字関根 165 石川町教育委員会生涯学習課
電 話 0247-26-2566 F A X 0247-26-4992

